所領の空に夜の帳がすっかり落ち、数刻が過ぎた後。
月の薄明りさえ見えない狭い闇の間に、小さな灯がぼんやりと浮かんだ。ゆらゆらと揺れる影に合わせて、低い声が響く。
「……準備は整ったか？」
「あぁ、一の字。問題ないぜ」
一の字と呼ばれた白い顔はこくりと頷くと、窮屈そうに並んだ顔を見回した。そしてわざとらしくコホンと軽く咳くと、居住まいを正し、
「では、これより『第五回犬山城様を人気投票一位にさせる対策会議』を開会する」
「おー」ぱちぱちぱち。
どこか気の抜けた歓声と疎らな拍手の音が、狭い室内にやんわりと響く。その余韻が消えるのを待ってから、一の字は唐突に近くの顔を指差した。
「じゃあ、三の字。とりあえず何か案出せ」
「いきなり団子かよ！」
肥後の郷土料理を口走りながら眉根を寄せたのは、三の字と呼ばれた、これまた白い顔を持つ者だった。渾身の冗談が滑った気まずさから逃げるように、更に口を尖らせる。
「こういう場合はまず、良い案がある者は手を挙げろ、とか言うところだろうが」
「そんな非効率なこと、一々待っていられるか」
一の字は不満たっぷりに鼻を鳴らした。
「だいたい、手が短いから挙げているかどうかが分からんのだ」と、短い腕を組んで頷く。
「なるほど。確かに」「背中に届かないしな」「あ、ほんとだ！　ぜんぜん無理だ！」
「……仕方ないなぁ」
ころころと床を転がりながら遊び始める兄弟たちを一瞥して、三の字は溜息を吐いた。
「とはいえ何か案と言われてもな」と、しばし黙考し、
「……やはり、犬山城様の愛らしさを押し出していくのが一番良いんじゃないか？　兎にも角にも我が姫様は超絶に可愛いし。それに、可愛いし」
「あぁ、可愛いな」「可愛くないところが無いな」「犬山城と書いてカワイイと読むしな」
「犬山城様が可愛いのは百も、否、万も承知の話だ」
口々に賛同し始める仲間たちの盛り上がりを制し、一の字はかぶりを振って答えた。
「だが、他の城娘様も犬山城様に劣らずの美人揃いときている。市井の町娘と比べるならいざ知らず、城娘同士となれば些か決め手不足だと、以前に話した筈だが？」
「んー、そうだっけか？」「覚えてないなぁ」「何せ昨日の朝ご飯も覚えてないしな」
「……」

もちろん、この遣り取りも以前のそれと同じであることは言う迄もない。

特に悪びれる様子も無く首を傾ぐ白い顔の群れを見て、一の字は頬を掻いた。すると、騒がしい群れの中から短い手がひょっこりと現れる。

「なら、犬山城様の忠心を『あぴーる』するのはどうだ？　一の字」

「忠心？」

「そりゃあ忠義を尽くす心って意味さ、兄弟」「それは知ってるよ、四の字」

むすっとして答えると、どこか得意げに腕を組んだ白い顔、四の字は更に自信満々といった態度で、ふふんと小鼻をうごめかした。

「何と言っても、殿の厠にまで附いて行くほどの忠臣ぶりだからな、うちの姫様は。いくら城娘多しと言えど、そこまで一意専心な城娘様もそうは居るまいてよ」

「厠どころか風呂も寝所も付いてくしな」「確かに胸を張れるな」「張る胸は無いけどな」

「犬山城様の忠心は、間違いなく大きな強みだ。けどな」

一の字は墨汁を流したような闇がたゆたう天井を眺めて、わずかに顔を顰めた。

「どうも昨今の人間はどちらかと言えば淡泊な関係を好むと聞くからな。姫様のように忠心があまりに強過ぎるのは、却って疎まれる場合もって、この話も前に話しただろうが」

「ありゃ、そうだっけか」「まぁ今日の夕ご飯も覚えてないし」「それは覚えてろよ」

「……」

またわちゃわちゃと騒ぎ出す兄弟たちの姿に、一の字は生温い吐息を漏らした。

こうして毎度何一つ変わらぬ遣り取りが延々と続くのだ。増えていくのは会議の回数と白髪の数ばかり。むろん白髪など生える訳もないが、そうであっても不思議ではない。しかし、まさにこれこそがこの会議の本懐だと気付かれてはいけないのだ。

いつの間にか夜はすっかり更け、邯鄲の鳴く声も遠くなっていた。良い頃合いだろう。

「……なら、そろそろ」

「じゃあ、そういうお前はどうなんだ？　一の字」

満を持して閉会の言葉を繰り出す間際、声を上げたのは一の字のすぐ隣に座していた白い顔、二の字だった。やや苛ついた様子で一の字の方に向き直る。

「お前は俺たちが考えた案をただ否定するだけで、自分から何も案を出さないじゃねぇか」

「それはお前たちが毎回同じ案を繰り返すからで……」

「だったら、同じ案じゃない別の案を出してくれよ。物覚えのいいお前なら、覚えの悪い俺たちよりよっぽど良い案が思い付くだろう？」

「それはまぁそうかもしれないが……」

歯切れ悪く顔を逸らしたその時点で。会議の結論はとうの昔に出ていたのだ。

もしこの場にいる全員が須らく納得する、決定的な案があったのならば、こうして何度も会議を開く必要など無い。会議が未だに開かれているということは、その妙案が無い、つまり「犬山城様が絶対に一位になれない」という厳然たる事実を突き付けているのだ。

しかし犬山城様を支える従者として、さらに思い慕うものとして、この不都合極まりない現実を受け入れることは出来なかった。疑うことすら許されないのだ。

だからこそ、この会議は結論を濁して適当に散会する必要があった。わざわざ一の字が音頭を取り、会の進行役を買って出るのも全てはその為だ。とは言え、今宵ばかりはそうともいかないらしい。今までのツケというものだろう。

「……分かった」

期待と不安が入り混じった視線を向ける兄弟たちに向かい、一の字は仕方なく覚悟を決めると、腹の底から深々と息を吐いた。

「正直な話、犬山城様の良い所なんて」

「まだ起きてるの？」「!!」

締め切った部屋の障子をそっと開いたのは、彼らがよく聞き知った凛と響く声。

わずかな隙間から覗く翡翠の瞳をしぱしぱさせながら、声の主は小さく欠伸した。

「夜も遅いのに、さっきからみんなでわんわんわんわんって……何か楽しいお話でもしてるの？　それとも大事なお話なら、私も混ざった方がいい？」

ぶんぶんと、白い顔の兄弟たちは一斉に首を横に振った。良い筈が無い。

「そう？　ならいいんだけど」星屑のような光を称えた銀髪の影が、障子越しに揺れる。

「みんな仲が良いのは好い事だけど、あんまり夜更かしとかしちゃダメだよ？　明日、というかもう今日だけど、朝早いって殿たちが言ってたし」こくこくと大きく頷く一同。

「うん。それなら大丈夫だね……じゃあ、私ももうちょっと寝よっと。おやすみ～」

今度は大きな欠伸を噛み殺しながら、声の主はくるりと踵を返した。「あ、そうだ」

自室へと進み出す刹那、まだ開いていた障子の間からにゅっと顔を差し入れて、

「夜中はまだまだ冷えるから、ちゃんとお腹あったかくして寝るんだよ。いい？　じゃあ、今度こそおやすみ～」

とんとんと廊下を歩く可愛らしい足音が彼方に消え去った後で。

一の字は静かに、しかし強い口調で呟いた。己の浅慮を悔いながら。

「犬山城様の良い所なんて『全部』以外無いだろ」

「そうだな」「異議なし」「当然の話だったな」「これ勝ったわ、圧勝だわ」

間髪入れず賛同する犬たちの言葉に、一切の贔屓も世辞も無かった。

さもありなん。いったい何を心配する事があろうか。小賢しい理由など用意せずとも、我

らの主が一位となる事に疑いなどある訳が無かったのだ。
「…さて、どうする兄弟？」
上手く落着したと見て、二の字は手近な灯りの火を吹き消し始める。
「今日はこれで散会するとして、次はいつ開くんだ？　来週か？」
「いや、次は無い」「もう止めるのか？」「そりゃそうさ」
一の字は不敵な笑みを浮かべると、小さく肩を竦めながら答えた。
「次の一位は絶対に犬山城様だからな。今さら対策する必要も無いだろうよ」
「……あぁ、違いない」